
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 18

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 341.連続的かつ非連続的な問いと答えの変容プロセス
- 342.人と組織の発達支援に向けたダイナミックシステム理論のメタファーについて
- 343.継続的に書くために
- 344.人と組織の発達に求められる言語記述による「自己分節」と「自己解体」
- 345.ダイナミックシステム理論に関わる二つの派閥
- 346.オランダでの初めての友人たち
- 347.地から天へ天から地へ
- 348.これからの留學生活における未知なる醍醐味
- 349.街をあげての盛大な留學生歓迎セレモニー
- 350.母国を離れた理由の断片
- 351.経験の内的濾過と内的分化
- 352.未分化から生じる退行現象
- 353.研究内容をまとめながら
- 354.社会で奨励される諸々の活動とアイデンティティの喪失
- 355.過去・現在・未来のアイデンティティの対話
- 356.闘牛心
- 357.天気雨からの教示:「等結果性」と「初期状態依存性」
- 358.フローニンゲン大学のキャンパスを歩きながら
- 359.オランダ語クラスの開始
- 360.オートポイエーシスとアロポイエーシス

341. 連続的かつ非連続的な問いと答えの変容プロセス

フローニンゲン大学でのプログラムが開始する日が近づいてきた。この街ですでに一ヶ月も過ごしていたのかという驚きと共に、まだ一ヶ月しか経っていないのだ、という気持ちが生じている。最も正確なのは、時間の上ではわずか一ヶ月ばかりしか経過していないが、自分の内面で経験されたことの密度は濃く、それが時の質感を高めているような感じである、という気持ちだろう。

この一ヶ月は様々な出来事があったが、そうした出来事に光が当てられることは、私の日常が常に一定のリズムで刻まれていることの裏返しなのかもしれない。今日も淡々と自分の仕事を継続させている。少しずつ着実に自分の仕事を一歩でも前へ進めることの難しさと、その困難さを超克していく精神力により磨きをかけていく必要があることを感じている。

毎日似た様な問いに直面し、それに対して現時点での答えらしきものを提示しようとする自分が常にいる。こうした状態と格闘している最中、結局のところ、問いがあつて答えがあるのではなく、もしかしたら問いしかないのではないか、という様な考えに行き着いたのだ。

問いが全く同じであっても、それに対する答えがこれだけ時間と共に変化と深化していくものであるならば、やはり答えなど存在せず—存在したとしても一時的な仮の答えである—、問いしか存在しないのではないか、とただただ思わされる日々の中を今生きている。

そのような気づきの中、論文アドバイザーのサスキア・クネン先生の研究室を今年の一月に訪れた時にいただいた彼女の論文“Fischer’s skill theory applied to identity development: A response to Kroger (2003)”を午前中から午後にかけて読んでいた。

クネン先生は、特に青年期と成人期のアイデンティティの発達研究にダイナミックシステムアプローチを活用している欧州を代表する研究者である。この論文では、アイデンティティの発達研究に対して、エリク・エリクソン、ロバート・キーガン、カート・フィッシャーの三つの発達理論をダイナミックシステム理論の観点から捉え直すという面白い試みがなされている。

応用数学の一分野であるダイナミックシステム理論に言及する論文の多くには数式表現が出てくるが、この論文では数式が一切用いられていないため、アイデンティティの発達や上記三つの発達理論とダイナミックシステム理論について関心のある方にはお勧めできる論文である。

論文を読みながら、私たちのアイデンティティの発達が連続的なものでありながらも、質的に大きな変容を遂げる非連続的な性質を宿しているのと同じように、問いと答えの関係において、答え自身は連続的な同一性を保ちながら短期的には同様の答えを産出し続けるが、ある時何かをきっかけにして答えに質的な変容が発生するのではないかと思う。

先ほどの内容に対して自家撞着に陥っていると思うので、ここでもう一度整理した方が良さそうだ。先ほどは、探究の歩みを進める際には問いしか存在しないのではないか、ということ述べたが、やはり答えというものも重要なものとして存在していると思うのだ。

問いに対する答えというのは、私たちのアイデンティティのように連続的な同一性を保ちながらも、非連続的な大きな飛躍を遂げる瞬間があるのである。そして答えが紛れもなく存在しているからこそ、答えがある程度の深度に達した時、それが問いに影響を与え、これまでの自分では立てられなかったような新たな問いが現れるのだ。

そうであるならば、問いというものも連続的な同一性を保ちながら、質的に大きな発達を遂げるという性質を内包しているのだろう。私たちの内側で生じる問いや答えがこのような特徴と関係性を持っていることはとても興味深いことだと思うのだ。2016/8/28

342. 人と組織の発達支援に向けたダイナミックシステム理論のメタファーについて

今日からオーストリアの生物学者ルートヴィヒ・フォン・ベルタランフィ(1901-1972)の主著“General system theory: Foundations, development, applications (1968)”に取り掛かり始めた。この書籍はダイナミックシステム理論に通底する「一般システム理論」を学ぶ上で必ず読む必要がある、と思って日本にいるときに購入していたものだ。

長らく積読状態にあったこの書籍を紐解いたのは、以前の東京の自宅から成田空港へ向かう電車の中であったことを思い出した。私にとって電車の中というのは、落ち着いて書物を読むのに適した

場所ではなく、書物の概要を把握し、中身をざっと確認するための場所に過ぎない。そのため、その時の読み方ではベルタランフィの一般システム理論に関する理解を深めることはできなかったのだ。

今朝改めて本書を紐解き、今日からしばらくこの本を読み進めていくことになるだろう。全ての章立てと小見出しを確認し、もう一度中身を一瞥したところ、この書籍はやはりシステム理論全般を理解するための必須の基本書であるとわかった。

現在読んでいるのは2015年の改訂版であるが、今から45年以上も前に書かれたこの書籍の内容が色褪せることはないと感じた。もちろん、最新のシステム科学の知見から言えば、ところどころ修正すべき事実が本書に盛り込まれているのだろうが、ベルタランフィが一般システム理論を打ち立て、システム科学の領域を開拓していった軌跡を理論的・方法的な観点から辿り、その探究プロセスを追体験することができる。

改めて、このような新しい科学理論が打ち立てられる際には、既存の理論にとって変わる力が必要なのだと思った。「正しいメタファーが無ければ、ある対象を捉えることはできない」とトーマス・クーンが指摘するように、ベルタランフィは新しいメタファーを提示し、これまでの科学理論では見過ごされていた現象を私たちに見えるようにしたことに優れた功績があると思う。

科学的なパラダイムというのは、当然ながら諸々の理論や概念の集積体なのだと思うが、重要なことは人々を惹きつけるような(巻き込むような)力を持ったメタファーがそこにあるかどうかだと思うのだ。既存のメタファーよりも納得性と妥当性の高い新たなメタファーが提示されるとき、パラダイムというのは方向転換を始めるのだと思う。

これは本書で展開されている一般システム理論のみに当てはまることではなく、発達科学の領域におけるダイナミックシステム理論の誕生の際にも当てはまることであった。現在ダイナミックシステム理論を学びながらつくづく思うのは、この理論の有益性は、発達現象に関する新たなメタファーを私たちに提供してくれることだ。

ダイナミックシステム理論を大きく分けると、数式を使ったアプローチと理論的なアプローチの二つがあるが、研究者でもない限り、数式を使ったアプローチに親しむ必要性はそれほど高くないと考

えている。ダイナミックシステム理論が内包する数々の理論や概念を理解することは、発達現象に関して構造的発達心理学だけでは見えてこない様々な側面を浮き彫りにしてくれるのだ。

そうしたことを可能にするのが、理論や概念の元になっている独特なメタファーである。ダイナミックシステム理論が持つメタファーに習熟すればするほど、発達現象に関してこれまで見過ごされてきた新たな側面が開示されて来るということを日々実感している。それゆえに、個人や組織の発達支援を行う実務家の方たちにも、ダイナミックシステム理論の数式的側面ではなく、理論的側面には是非着目していただきたいと思う。

343. 継続的に書くために

日々の生活の中で湧き上がる自分の思念や感情を文章という形で表現しなければ、自分が現在抱えている課題を克服することはおろか、深く生きるという考えに基づいた生の前進もありえないと気づいてから、文章を毎日少しずつ書くことが習慣化している。この実践が習慣化してから、数ヶ月が経つであろうか。

継続的に書くという実践の意義を感じながらも、現在、文章をあまり書きすぎないように自分を抑え続けている。具体的には、一日に4000字程度の文章を書くことに留めたほうが良いと感じているのだ。確かに、一日に4000字程度の文章を書き続けていけば、一ヶ月で単行本一冊分ぐらいの文字数となる。しかし、これぐらいの量だと全く問題にならずに日々文章を書き続けていくことができると感じている。

思い起こしてみれば、拙著『なぜ部下とうまくいかないのか：自他変革の発達心理学』は非常に短い期間で書き上げた作品であった。編集者の方の支援もあり、この書籍の全体像や物語展開について頭の中で比較的鮮明なイメージ図を描けていたことや、何よりロバート・キーガンの発達理論はこれまで数年間継続的に取り組んでいた理論モデルであったため、逐一文献に立ち返る必要もほとんどなかったのだ。

そうした状況にあることが理解できていたため、私は2015年のクリスマス明けから五日間でこの書籍を書き上げようと決心していた。実際に、一日一章、20,000字を五日間にわたって書き続けることであの書籍が誕生したのである。

この時の経験から、一日に20,000字を書くことは自分の集中力の限界であると感じたし、この分量を一生涯にわたって毎日書き続けていくことは不可能だと気付いたのだ。私にとって何よりも重要なのは、突発的に一つの仕事を完成させることではなく、長大な時間にさらしながら時間をかけて継続的に一つのことに取り組み続けることなのだ。

これは多分に私の性格や資質から来ているものだと思う。私は早く走ることを好まず、ゆっくり長く走ることを好むのだ。これは文章を書くという実践にも当てはまることに最近気づいたのだ。

要するに、文章を一日に大量に書くというのは自分の特性に合致していないのである。何より、衝動に任せて文章を書こうとすると、それによって継続性という貴重な波が途絶える気がするのだ。

そう考えると、一日に二つや三つの記事を合計で4000字程度書くことが今の自分にとっては適量なのである。自分の心が生み出す書くという継続的な波に乗ったものであれば、とにかくテーマは何であっていても良いと思っている。

重要なことは、呼吸を毎日するように文章を書き続けていくことである。こうした継続的な実践によって初めて、自分の身に起こる変化の波を絶えず掴みながら生きていくことができるのだと思うのだ。

344. 人と組織の発達に求められる言語記述による「自己分節」と「自己解体」

この関心事項はここ最近何度も現れているが、書くことの本質と発達の本質は相通じるものがあるため、書くという実践が発達を促進するのではないかという考えが日増しに強くなっている。

そもそも書くという行為には、言葉を用いて対象を分節するという非常に重要な役割がある。私たちは極めて高度な意識状態の中でしか、真の意味で世界をありのままに見ることなどできない。そうした認識上の限界を持つ私たちにとって、言葉を用いて世界を認識可能なものに切り分けていくという「分節化」が世界を把握する際に重要になる。分節化のされていない渾然一体となった世界では、私たちは意味あるものを何も掴むことはできないのだ。

こうした言葉の特性を考えてみると、言葉を用いて自己の姿を記述していくことは、自己を分節化することに他ならないのではないだろうか。そして書くことを通じた「自己分節」というのが実は、内面の発達を促すことにつながるのではないかと考えている。

構造的発達心理学において、発達の根本原理に「分化(differentiation)」と「統合化(integration)」という二つの作用があることはこれまでの記事で何度か紹介してきたように思う。ロバート・キーガンの発達理論もこの根本原理に則ったものであり、私たちが主体を客体化しながら成長していくというのは、まさに既存の主体を分化してそれを認識可能なものとすることによって、主体の成長を育てていくことに他ならないのだ。

ここに、内面の発達を促すことに関して、自己を言葉で記述していく重要性があるように思われる。つまり、自己の中で生起する思考や感情などを言葉で書き表すというのは、自己の客体化に他ならず、そうした客体化が主体の発達を育てていくということである。また、自己について言語で記述する最中、私たちは自己と自己でないものを絶えず認識することを無意識的に迫られていると言えるのではないだろうか。

これは言い換えると、自己について何かを書こうとする時に、絶えず言葉では表現できない何かは自己に残っているという感覚である。言語化によって何か整理されるという感覚に反して、実は言語化の本質にはこうした残尿感が必ず付きまとっていると思うのだ。

簡単に述べると、自己について言葉で記述することは、自己の中で生起する諸々の現象を客体化できるという意味の分節化のみならず、自己と自己ではないものの境界線を明らかにしてくれるという意味の分節化が同時に存在しているということである。そして重要なのは、こうした二重の意味での分節化によって、ある種の自己解体が起きることだ。

言語による分節化を進めていくと、必ず自己解体を迫られる瞬間がやって来る。それはとても明白な感覚かもしれないし、とても微妙な感覚かもしれない。いずれにせよ、こうした自己解体はある種の自己否定のようなものであり、言葉を用いて分節化を進めると必ずその限界に突き当たるのだ。

ここで述べている限界とは、例えば、言葉を用いてある考えをそれ以上進めることができない限界であったり、言葉を用いてある感覚をそれ以上捕まえることができない限界などである。こうした限界に突き当たる時、自己解体が生じるのだと思う。

こうした自己解体は自己否定や言葉の限界などによって引き起こされるが、意味合いとしては否定的なものではなく、自己超越を生み出すきっかけを作り出すものだと考えている。自己の発達とは現在の自己を超越していくことであり、すなわち新たな自己を創出していくということである。

そして興味深いのは、一度解体された自己は新たな特徴や機能を内側に取り入れる形で発達していくのだ。このプロセスがまさに「統合化」なのである。

この統合化に関して、自己解体した空間に新たな自己が創出される余白が生まれるのではないかと考えている。こうした余白を生み出すものが自己解体という現象であり、自己解体を生み出すものが言語を用いた自己分節なのだと思う。

そして言うまでもなく、言語記述による発達現象は個人のみには当てはまるのではなく、組織にも当てはまると思うのだ。組織で生起する諸々の現象を内側と外側から記述していくという実践を継続させていくと、組織にも自己解体が起こり、それは自己超越として新たな発達段階を組織に生み出すのではないかと考えている。

人も組織もなかなか変わらないのは、結局のところ、種々の言語を媒介にして日々の活動がなされているという根本的な特性に反して、活動を生み出す言語を一切振り返っていないからではないか、と思うのだ。人も組織も平等に、言語に怠惰なものには発達は起こりえない、と強く思う日々である。

345. ダイナミックシステム理論に関わる二つの派閥

今日は、デイヴィド・ウィザリントンの“The dynamic systems approach as metatheory for developmental psychology”という論文を読んでいた。これは実に秀逸な論文であり、ダイナミックシステム理論を発達研究にメタ理論として活用する際に考察すべき哲学的な問題が色々と提示されている。まさに私の学位取得論文で触れたいような哲学的なテーマがいくつも議論されているのだ。

この論文は私が期待していた以上の洞察を含むものであったし、想像していた以上に難解でもあった。簡単にこの論文の概要を紹介すると、ダイナミックシステム理論とはそもそも、発達プロセスにおける安定性や変化を探究するメタ理論的な枠組みとして活用されてきたという背景がある。

しかしながら、ダイナミックシステム理論をメタ理論として活用する際に、アプローチの異なる二つの派閥が存在するとウィザリントンは指摘している。一つは「純粋な文脈主義者」と呼ばれる派閥であり、これは全ての発達現象を「今ここ」という文脈の中で説明付けようとする。もう一つは「有機体的文脈主義者」と呼ばれる派閥であり、これは発達現象を「今ここ」という局所的な文脈の中だけで説明するのではなく、私たちと文脈の双方を有機体とみなし、両者が相互作用するという認識に基づいて発達現象に迫っていく。

簡単に述べると、前者の派閥が信奉している思想は、文脈とは所与のものであり、私たちは所与の文脈の中に組み込まれる形で知性や能力を発揮していく、というものである。一方、後者の派閥が信奉している思想は、文脈は所与のものではなく、私たちと文脈は相互に影響を与え合い、私たちは文脈に参加する形で知性や能力を発揮していく、というものである。

ダイナミックシステム理論に関する数学的な技術的問題ではなく、哲学的な思想的問題に関する書籍や論文を長らく読んできた中で、元インディアナ大学教授エスター・セレン(1941-2004)を代表的論客とする「ブルーミントン学派」とフローニンゲン大学のポール・ヴァン・ギアートを代表的論客とする「フローニンゲン学派」の思想上の違いについて、私の中でこれまで判然としないものがあった。両者の思想的な違いは結局のところ何なのだろうか、と思案していたのだ。

幸運にも、ウィザリントンの論文を読むことによって、両者の違いが徐々に明らかになってきたのである。一言で述べると、前者の「純粋な文脈主義者」に該当するのが「ブルーミントン学派」であり、後者の「有機体的文脈主義者」に該当するのが「フローニンゲン学派」なのだと思うに至った。

また、後者の「有機体的文脈主義者」に該当するその他の研究者としては、元ハーバード大学教育大学院教授のカート・フィッシャーや新ピアジェ派の代表的人物ロビー・ケース(1945-2000)に師事していたラドバウンド大学のマーク・レヴィスなどが存在している。

もちろん現在私はフローニンゲン大学にいるということもあるが、それした事実以上に、これまで抱えていた違和感と照らし合わせてみた時に、私は後者の思想を支持すると思うのだ。「発揮される知性や能力のレベルはその人そのものを表すものではなく、ある文脈においてその人が発揮する知性や能力に付与されるものである」という発言は確かに正しい側面を持つ。しかし、そこには何か欠落している真実がありそうだ、という違和感をずっと抱えていたのだ。

この違和感を安易に消し去ろうとするのではなく、あえて保持することを心がけていた時に、私たちが受動的に文脈に置かれて知性や能力を発揮するというよりも、私たちは文脈を能動的に規定しながら知性や能力を発揮していくのではないだろうか、という考え方が徐々に私の中で芽生えていたのである。

より詳しく述べると、文脈そのものを作り出す働きや文脈を改編する働きを私たちの知性は備えているのではないかと思ったのだ。要するに、文脈は所与のものではなく、私たちは文脈それ自体を生み出すのである。私たちは文脈に置かれながらも、文脈を創出することにも参与する形で己の知性や能力を発揮していくのではないか、ということである。

そうでなければ、全く同じ文脈を設定しているように思える環境の中で、あれほどまでに知性や能力の発揮の仕方に差が生まれることが説明できないということ、自分のこれまでの経験から振り返っていた。

346. オランダでの初めての友人たち

今日は午前10時から開催される奨学金授与のセレモニーに参加してきた。2016年度の留学生の入学者は2300人ほどであり、全ての学生がこの奨学金に応募したわけではないが、大変ありがたいことに約20名の奨学生の一人名に選出していただけた。

この奨学金は、オランダの文部科学省から支給された返済義務のないものであり、一年間分ぐらいの生活費が賄えるのでとても有り難い。この奨学金授与のためのセレモニーが“Academy Building”というフローニンゲン大学を象徴する建物の一室で開催された。

セレモニー会場に着いてみると、そこは写真でしか見たことがなかった重要な式典の際に用いられる非常に厳粛な部屋であった。以前から足を踏み入れてみたいと思っていた部屋だっただけに、感慨もひとしおであった。

セレモニーの五分前に会場に到着すると、大半の参加者がすでにその場にいた。そしてこの奨学金を取りまとめている女性の方が、その場にいる参加者にフローニンゲンの街や大学の歴史について小話をしていた。

本当はもう少しゆっくりとこの部屋の雰囲気を感じたい、両壁に掛かった過去の偉大な教授陣たちの絵画写真を拝見したかったのだが、そうした余裕はなく、この部屋が醸し出す何とも言えない厳粛な雰囲気の中に私は取り込まれていったのだった。

この時がやって来るのは実に長かった。こうした学術的な雰囲気の中に身を置いて、自分の仕事に打ち込む日が来ることを首を長くして待っていたのだ。そうした厳粛な雰囲気と自分の呼吸が調和し始めた時、フローニンゲン大学での本格的な学術探究がようやく始動し出すことを感じた。

その女性の話がひと段落したところで、奨学金の授与証書を付与してくださる教授から挨拶があった。それは私たち奨学生のこれからの学術生活の門出を祝う激励の言葉でもあり、奨学金を付与された留学生の代表として学術探究に克己して励み、その知見を社会に還元するように私たちを後押しするような力強い言葉でもあった。

そして、一人一人の名前が読み上げられ、この教授から授与証書を一人一人手渡され、一人ずつの記念撮影が行われた。読み上げられる一人一人の名前を全て聞いたところでわかったのは、日本人は私しかいないようであり、その他のアジア諸国から来た人は7名ぐらいのようだった。残るは他のヨーロッパ諸国から来たと思われるような人たちばかりであった。

この教授から全員に対して「いつ頃フローニンゲンに来たのか？」という質問があった時、驚くことに、たいていの人が「昨日」や「数日前」と答えていた。そして隣に座っていた小柄な男性はなんと、「数時間前」と答えていたのだ。私が最初の数日間に経験したようなことがここにいる人たちには起こらず、全員の生活が円滑に開始されることを願うばかりである。

証書の授与が終わった後、一旦建物の外へ出て、メインの建物を背景にする形で今度は全員での記念撮影が行われた。記念撮影が終わった直後、私の背後から私に向かって懐かしい言葉が届けられた。

見知らぬ女子学生:「コンニチハ！（日本語）」

私:「えっ？（英語）」

見知らぬ女子学生:「コンニチハ！日本人の方ですか？（日本語）」

私:「はい（英語）。そうです（日本語）。どうしてわかったんですか？（英語）」

見知らぬ女子学生:「え〜っと（以下、英語）・・・」

私:「もしかして名前からですか？」

見知らぬ女子学生:「ええ、そうです。名前から（笑）」

私:「そうでしたか（笑）。どちらの国のご出身ですか？」

見知らぬ女子学生:「タイから来ました！私の名前はアイです。」

私:「タイからですか〜、僕の名前は洋平です。ちなみにどこで日本語を覚えたのですか？」

アイ:「実は二年間ほどJALで客室乗務員として働いていたんです。」

私:「おお、JALで働いていたんですか〜。」

アイ:「ええ、そうなんです。どのプログラムに在籍しているんですか？」

私:「心理学の修士課程です。アイさんは？」

アイ:「私は国際法の修士課程です。」

私:「そうなんです〜、JALのCAから国際法へのキャリアチェンジというのは珍しいように思うのですが、どんなきっかけでここへ? あっ、何やら次の場所に行かないといけないみたいですね。是非またゆっくり話を聞かせてください。」

アイ:「ええ、是非♪ Line使ってますか?」

私:「え〜と、使っているとさえ使っているような(笑)」

アイ:「良かったら連絡先を交換してください。」

私:「ええ、もちろん。このアプリですよ?」

アイ:「えっ、登録されてる友人が一人しかいないじゃないですか! (笑)」

私:「はは(苦笑)。コミュニケーションツールは極力Emailだけにしようと思っていて…。それと、以前使っていたLineのアカウントのパスワードを忘れてしまい、これが先週念のため新しく作った三つ目のアカウントです(笑)」

アイ:「面白い(笑)。」

そのようなやり取りがなされた後、タイから来たアイという留学生はオランダでの私の初めての友人となり、Lineでの記念すべき二人目の友人となった。こうしてフローニンゲン大学で初めての知人が誕生したところで、再度取りまとめの女性がこのメインの建物の各部屋を案内してくれた。

様々な部屋を案内してもらった後に、とりわけ私がもう一度入ってみたいと思ったのは、壮麗なステンドグラスで飾られた一室である。この部屋は、博士号取得予定者の最終口頭試験や国内・国外の著名な学者による講演が行われる場所である、ということを知った。特にこの部屋は美術的な観点からもっと時間をかけて見るべき箇所が沢山あると判断したため、後日改めて足を運んでみたい。

一通り建物の案内が終わったところで、一階のカフェテリアに全員が招待され、そこでコーヒーとケーキをいただいた。各部屋の案内を全て聞いた後、印象に残った話や自分の気持ちなどをメモに残していたため、カフェテリアに入るのは私が一番最後であった。

すると列の最後尾に、「到着したのは数時間前」と先ほど言っていた小柄な男性が立っていた。外見から察するにヒスパニックのようであった。

私:「こんにちは。」

ヒスパニック系の男性:「こんにちは。どこから来たんですか？」

私:「日本からです。あなたは？」

ヒスパニック系の男性:「僕はキューバです。」

私:「おお、キューバから来られたんですね。専攻は何ですか？」

ヒスパニック系の男性:「哲学です。」

私:「哲学！！！！！！！！」

キューバ人の男子学生:「どうかされましたか(驚笑)」

私:「いや～、フローニンゲン大学に来る前から決めていたことがあって、『哲学科に在籍している学生と絶対に友人になるぞ』と誓いを立てていたんです(笑)。」

キューバ人の男子学生:「そうだったんですね(笑)。あなたの専攻は？」

私:「心理学です。同時に、認識論(epistemology)や心の哲学(philosophy of mind)にも以前から関心があったんです。哲学領域の中でも特に何を専門としているんですか？」

キューバ人の男子学生:「まさに認識論や心の哲学です。それと言語哲学です。あと、キューバで哲学史について教えていました。」

私:「素晴らしい！！あっ、まだ名前を名乗っていませんでしたね。“Yohei”です。」

キューバ人の男子学生:「Yo…すいません、もう一度教えてくださいませんか？」

私:「ああ、Yoheiです。こうすると覚えやすいと思います(ノートに文字を書きながら)。

“Yohei ⇨ Yo!Hey!”です(笑)」

キューバ人の男子学生:「それはいい(笑)。すぐに覚えられますね。僕の名前はシーサーです。」

私:「シーサーの綴りは…古代ローマ帝国の皇帝の名前と同じですか？」

シーサー:「ええ、同じです。まさか皇帝の名前が引き合いに出されるとは思ってもみませんでした(笑)」

私:「シーサーと聞いてとっさに出てきたのがローマ帝国の皇帝の名前だったもので(笑)。それではあちらの席に着いてから、じっくり話し合しましょう。」

シーサーとの出会いは私にとってこれ以上もないぐらいに嬉しいものであった。上記のやり取りの中でも出てきたように、私は前々から自分の探究内容をここから先さらに深めていくためには、哲学と真剣に向き合わなければならないと思っていたのだ。

実際に昨年日本滞在中において、自分の専門分野の書籍や論文にはほとんど目を通さず、哲学書ばかりを読んでいたように思う。自分の探究内容をこれから時間をかけてゆっくりと深めていこうと思った時に、探究内容に含まれる諸々の概念一つ一つを自分の中で定義付けていきたいと思っていたし、何より研究の中で私が突き当る問題は往々にして哲学が扱うテーマばかりであったのだ。

そのため、私の今後の研究を技術的というよりも思想的に支える基盤のようなものを構築していくために、昨年は哲学書と向き合うことが多かったのだ。しかし、哲学に関する専門的なトレーニングを

受けたことがない私にとって、自分一人で哲学的な探究を進めていくことの限界が見えており、共に学び合うような仲間が不可欠であると思っていたのである。

フローニンゲン大学では二年間の内に二つの修士号を取得する予定だが、フローニンゲン大学に合計で三年間滞在し、ここでの三つ目の修士号は哲学にするのもありだな、とつい昨日も考えていたほどであった。全ての学問領域や実務領域の下支えをする哲学の重要性に気付かされ、哲学に関する正規のトレーニングを積みたいと思っていたのだ。仮にそれができなくても、フローニンゲン大学の哲学科の学生と親交を持ちたいと思っていたのだ。

こうした思いを持っていたため、シーサーとの出会いは私にとって掛け替えのないものだったのである。その後、一時間以上にわたってシーサーと哲学全般に関する意見交換ができたのは私にとって至福であった。

興奮を抑えながら会話を進めることは至難の技であり、終始興奮を伴わせながらシーサーに無数の質問を浴びせていた。それでも、先ほどこの国に到着したばかりのシーサーは全ての質問に誠実に答えてくれたのである。キューバからやってきたシーサーという小柄な男性は、フローニンゲンでの私にとって二人目の大切な友人となった。

そういえば、先ほど知り合いになったタイ人のアイはセレモニーの最中に偶然にも私の前の椅子に座っていた。そして、シーサーは私の横に座っていた。これはまた何か意味のある偶然かもしれない。2016/8/30

347.地から天へ天から地へ

昨日の新たな友人関係の広がりについて少しばかり考えていた。つくづく人間は人との関係を通じて学ぶものだと思わされた。これは言い古された言葉なのかもしれないが、間違いなく私たち個人個人は人と人との間に存在している社会的な生き物である。それゆえに、ある個人が何かを学ぼうとするとき、学びや実践を共有する他者の存在は不可欠となると思うのだ。

昨日湧き上がっていた感情というのは、学びに関して実に根源的かつ必須のものなのではないかと思うに至った。成人期に入っても、いや成人期を迎えたからこそ、他者と共同することによる学びの重要性を痛感させられたのだ。

それにしても昨日シーサーに出会ったときに感じた閃光のようにほとぼしる喜びは何だったのだろうか。学びには触発性があるのかもしれない。まだ一度しか会話をしていないこのキューバ人に対して、なぜだか強い親近感があり、彼が私の学びを刺戟する触媒のような掛け替えのない存在に思えるのだ。

改めて思い返してみると、そうした閃光のようにほとぼしる喜びという感情が上から下へではなく、下から上へという動きを伴って生じるのが面白かった。ということは、どうやらこの感情の根源は地上にあり、地上から天上へと向かおうとする感情エネルギーが内包されているのかもしれないと思った。

学びに関するこうした地上から天上へと向かう感情は、よくよく思い起こしてみると、実際にこの瞬間に生きている他者と学び合う中で感じる人が多いように思う。そういえば、これまで提供してきた発達理論に関するオンラインゼミナールの中で、受講生とやり取りをするときにこうした感情を度々感じていたことを思い出した。とても有り難いことである。

地から天へと向かうこうした感情を最近の私はどうやら忘れていたようである。感情の回路が閉じかかっていたところでシーサーに出会うことができたのだ。忘れつつあった感情を呼び覚ますようなやり取りが昨日の彼との対話の中であつたため、閃光のようにほとぼしる喜びが背筋を駆け昇っていったのだろう。

一方、学びに関する感情のベクトルはどうも地上から天上へという方向のみならず、天上から地上へという方向もありそうなのだ。過去の偉大な哲学者の思想と真に触れた時、あるいは過去の偉大な芸術家の作品に真に触れた時は、下から上へでは決してないのだ。上から下なのだ。

これは先日の欧州小旅行で訪れたシューマン博物館で得られた確信と関係があるかもしれない。過去の偉大な哲学者や芸術家が偉大であると言われる所以は、やはり彼らが残したものが普遍性と永遠性を身にまとったからだと思うのだ。そして重要なことは、こうした普遍性や永遠性の帰属は

天上にある。だからこそ、彼らの作品が体現する普遍性や永遠性に触れた時には、天から地への感情エネルギーが身体を駆け下りていくのではないか、と思った。

偉大な作品はどれも共通して「啓示的」な何かを内包しており、私たちの存在を宙吊りにするような力がある。「宙吊り」にされるためには、下からではなく上からの働きかけが必要だろう。

さらに、こうした啓示的な力は「頭を金づちで殴られたような感覚」と形容されることがしばしばある。地面から金づちで頭を殴られた人を見たことがあるだろうか？少なくとも私はない。金づちで頭を殴られるためには、その人よりも高い地点から何かしらの働きかけが必要なのである。これこそが天上から地上への働きかけだと思うのだ。

こうした働きかけを私にもたらしてくれたのはやはり過去の偉大な作品が多く、正直に過去の自分を振り返ると、現存する人物の作品がこのような感覚を私にもたらしてくれたことはほとんどないかもしれない。強いて挙げるとすれば、アメリカの思想家ケン・ウィルバーの作品などは天上からの衝撃に近かったように思う。

そう思うと、今に生きる人間が真に偉大なものを創出することが困難な時代に私たちは生きているのかもしれない。

348. これからの留学生活における未知なる醍醐味

いよいよ本格的に自分の中で新しい何かが始まるのを感じる。実際に、これまでには見えなかった自分の側面や新たな行動への心の動きを容易に見て取ることができるのだ。新しい挑戦に乗り出すことによって、やはり自分の中で新たな運動が生じるらしい。これは実に興味深い。

今日は非EU留学生のセレモニーに参加してきた。昨日の奨学金授与に関するセレモニーは20人ばかりの小規模のものであったが、今日の非EU留学生のセレモニーは随分と人が多かったように思う。それもそのはずで、非EUから来た学部生、修士生、博士生が集まるセレモニーだったからである。そう考えると、明日のEU圏と非EU圏を含めた全ての留學生が一堂に会する留學生歓迎セレモニーは相当な人数になるのだと予想される。

今日のセレモニーは歓迎会という意味合いよりも、非EU圏の留学生に必要な各種の事務処理を全て完了することに重きが置かれたものである。具体的には、住民登録や銀行口座の開設、来た国によっては結核の予防接種などである。

“Academy Building”と呼ばれるメインの建物でこのセレモニーは催され、何人かの留学生と話をする機会があったが、やはり大抵の人達はフローニンゲンに来たばかりらしい。正直なところ、一ヶ月前にこの街に来てすでに各種の手続きを自分で進めていた私にとって、ここで行う必要な手続きというものはほとんどなかったのだ。

実際に、ズヴォレの街で申請していた居住証明カードを受け取るだけでよかったのだ。そのため、今日のセレモニーに参加する意味はほとんどなかったのであるが、今日ここに来たおかげで一人の日本人留学生と知り合うことができた。

彼は京都大学の学部生とのことであり、六ヶ月間ほどフローニンゲン大学で学びを得るということを私に教えてくれた。京都大学は理系に関しては以前からフローニンゲン大学と留学提携を結んでいたそうだが、文系に関しては今年から留学提携を結んだそうである。彼は京都大学の文系から派遣された第一期生かつ唯一の学生とのことである。

大阪大学は随分以前からフローニンゲン大学と留学提携を結んでいたようであるし、一橋大学も確か今年から経済学部の交換留学制度をフローニンゲン大学と提携した、ということを目にした記憶がある。いずれにせよ、彼のように学部生の多感な時期に国外で学びを得ることができるというのは、実に大きなことだと思う。

留学をすることに決まった年齢など存在せず、幾つになっても国外で学びを得るというのはその人に大きな実りをもたらすと思うのだ。ただし、各年代によって、より厳密にはその人の内面の成熟に応じて、留学というのは質的に異なる実りを私たちにもたらすと考えている。

そのため、私は彼のような20代前半でしか得られないものを得ることはできないだろうし、逆に彼は私の年齢でしか得られないものを得ることはできないだろう。各年代や各人の成熟の度合いに応じて、その時にしか得られない経験というものが「留学」という事象に不可避に内包されているのである。

この年齢の、この発達段階でしか経験し得ぬ事柄の一つ一つを逃すことなく、それが自分にとってどのような意味を持つものであり、どのような変容を自分にもたらすのかを絶えず検証し続けたいと思う。五年前に米国に留学した時と今回の留学とでは、経験される事柄も経験に対する意味づけも全く違ったものになるというのは明白である。ただし、その違いが今この瞬間には全く未知であるということが、これからの留學生活の探究的醍醐味なのだと確信している。2016/8/31

349. 街をあげての盛大な留學生歓迎セレモニー

昨日はフローニンゲンの街をあげての盛大な留學生歓迎セレモニーがあった。2016年の九月に入学した留學生は2300人超とのことであり、新しく入学した全ての留學生が参加したわけではないと思うが、昨日は久しぶりに多くの人々が群がる光景を目の当たりにした。多くの人に囲まれた疲れからか、昨日はいつもより一時間多く睡眠をとることになった。

それでは、思い出せる範囲で昨日のことを書き留めておきたい。

昨日はまず朝一番に、日本の大手人材会社さんとの共同プロジェクトを進めさせていただいていた。日本とオランダの時差は八時間ほどあるが、こちらの早朝は日本の午後に当たり、定時までの三時間ぐらひはなんとか一緒に仕事をする事ができる。また、昨今はSkypeやAdobe Connect等のオンライン電話システムも発達しているため、国をまたいでのコミュニケーションもほとんど問題なく円滑に行うことができる。

オランダに在住しながら日本の仕事を継続的にこなすことは非常に有り難い。日本の社会との接点を今後も持ちながら、こちらでの探究活動と生活を両立させていきたいと思っている。

午前中の仕事が終わると、昨日知り合いになった京都大学から来た学生と共に留學生歓迎セレモニーが開催されるマルティニ教会に向かった。教会に向かっている最中はそれほど留學生らしき人々を見かけることができず、このセレモニーはそれほど規模が大きいのだろうと高を括っていた。

しかし、教会に到着し、中に入ってみると、そこにはすでに無数の留学生がいたのだ。教会のパイプオルガンや壇上を真正面から見れる席を確保することが難しかったので、私たちは左右にある席に着くことにした。

無事に席に着き、隣に座った中国から来たファイナンス専攻の修士課程の学生と仲良くなり、会話を楽しんでいたところ、定刻通りにセレモニーが開始された。セレモニー最初の催し物は、“MIRA”と呼ばれるフローニンゲン大学の学生音楽グループによるクラシック音楽の演奏であった。

マルティニ教会が醸し出す厳粛な雰囲気の中に、このクラシック音楽は見事に溶け込んでいた。そして、マルティニ教会とクラシック音楽の中に全ての留学生が溶け込んでいくように感じたのだ。

MIRAによるクラシック音楽の演奏により、セレモニーの場が整ったところで、学長からの挨拶があった。学長の紹介があった時、二日前の奨学金授与セレモニーで証書を授与してくださった方が学長であることを初めて知った。

こうしたセレモニーはとかく形式ばった退屈なものになりがちであるが、進行役の二人の学生の掛け合いは、自由な国オランダを語る上で必ず持ち出される種々の話題に触れながらユーモアに溢れる形で進行されていった。また、学長も真面目な内容の中に終始ユーモアを交えながら挨拶を行っていた。

その次に挨拶を行ったのはフローニンゲンの市長であった。街の政治的代表者を呼ぶあたりにも、街をあげて留学生を歓迎している気持ちが伝わってきた。街の人口200,000人の内、学生が50,000人を越すため、大学都市としての地位をより確立するためにも、街と大学が見事に連携しているような印象を持った。

市長の挨拶も終わり、セレモニーが無事に終了すると、今度は大学のメインの建物に移動し、そこで出店のようなものを見物したり、大学が支給してくれた簡単な食事や飲み物をとった。フローニンゲンの街と大学が密に連携しているおかげで、学生であれば本日はフローニンゲン美術館に無料で入館できるということを聞き、セレモニーが終了したその足で美術館に向かった。

前々からこの美術館を訪れたいと思っていたため、このような機会を得ることで非常に幸運に思った。フローニンゲン美術館はとてもモダンな造りになっており、内装・外装ともに非常に綺麗である。

これまで単に遠目からこの美術館を見ていただけであったため、館内の広さを完全に見誤っていたことを思い知らされた。じっくりと作品を眺めようと思うと、無料で開放されていた二時間の間に全ての作品を見て回ることは不可能であった。スイスのニューシャテルで訪れたデュレンマツ美術館と同様に、この美術館には私を惹きつける作品が多く所蔵されていたため、後日また足を運びたいと思う。

美術館が受付付近で提供してくれたウェルカミングドリンクを飲み終わり、自宅に帰ろうとしていたところ、とても小柄な青年男性から声をかけられた。

小柄な青年男性:「こんにちは！オランダ語か英語を話せますか？」

私:「こんにちは。英語なら話せますけど。」

小柄な青年男性:「了解です！今から面白いものを見たくないですか？」

私:「(漂う胡散臭さに対して懐疑心を持ちながら)面白いもの？」

小柄な青年男性:「ええ、面白いものですよ～！」

私:「何ですか？」

小柄な青年男性:「今からマジックをお見せしましょう♪」

私:「マジック？マジシャンの方ですか？」

小柄な青年男性:「ええ、マジシャンをしています。」

私:「プロのマジシャンですか？」

小柄な青年男性:「はい、プロとしてマジックで生計を立てています♪」

私:「おお、それはすごいですね！どのくらいマジックをしているんですか？」

小柄なプロマジシャン:「もう10年以上になりますね～。今は国内のステージや国外を回ってマジックショーをしています。」

私:「10年以上ですか～。それは確かにプロの領域に入りますね。ちなみにどこの出身ですか？」

小柄なプロマジシャン:「えっ？ああ、確かに僕の外見だと分かりづらいですよ。出身はオランダですよ。ただ父親がインドネシア出身なものでこんな顔をしています(笑)」

私:「そうですか～、オランダ出身なんですね。それでは是非マジックを見せてください。目の前で見るのは初めてなのでとても楽しみです♪」

小柄なプロマジシャン:「それでは行きますよ～。ここに52枚のトランプがあります。一枚好きなものを選んでください。」

私:「じゃあ、これで。」

小柄なプロマジシャン:「(残りのカードをテーブルに広げながら)それでは、どこか好きな場所にそのカードを戻してください。」

私:「それではここに戻します。」

小柄なプロマジシャン:「(広げられたカードを再び一つに戻したところで)それでは一枚抜き取ります。選んだカードは…ダイヤの9ですね！」

私:「(!?)いえ、違いますよ…」

小柄なプロマジシャン:「おっと、失礼。それではこのカードは不要なので、ハサミで切ってしましましょう♪ よろしければ切られたカードをテーブルの上に置き、上から手で押さえておいて頂けますか？」

私:「この切り刻まれたカードを上から手で押さえておけばいいわけですね。わかりました。」

小柄なプロマジシャン:「ありがとうございます。それでは行きますよ～。そのまま切られたカードを手で押さえておいてくださいね。今から三つ数えるので、数え終わったのと同時に手を上に持ち上げてみてください。3、2、1・・・はい！」

私:「？」

小柄なプロマジシャン:「カードから手をゆっくり離してもらえますか？」

私:「えっ、ああ……。あれ！カードが元に戻ってる！」

小柄なプロマジシャン:「ふふふ(笑)。それではカードをひっくり返してみてください。」

私:「おお～！僕が選んだダイヤのキングじゃないですか！！これはすごいですね～。」

小柄なプロマジシャン:「ありがとうございます。そのダイヤのキングはお土産にどうぞ。」

その後、とても親近感の湧くこの東南アジア系の顔をした小柄なオランダ人マジシャンから幾つかのマジックを披露してもらった。実際に目の前でプロのマジックを見るのは初めてであったため、感動もひとしおであった。その後見せてもらったマジックも驚きの連続であり、どのようなトリックが隠されているのか全くわからなかった。

彼の名前はGuillaume Wibowo Goochelaarと言う。またどこかのステージで彼のマジックショーを観れることを楽しみにしている。

Guyllaumeと別れ、フローニンゲン美術館を後にして自宅に帰ろうとしている時、自分が特殊な意識状態の中にいることを確認した。ここ数日は誰かに作られた夢の中で生きているような気がしていたのだ。

今日からは再び自分の内側に流れる時間の中で仕事を進めていかねばならないと思った。

350. 母国を離れた理由の断片

何気なく先月末に終了したリオ五輪の結果を眺めていた。眺めていたのはメダル獲得に関するランキングデータである。その結果を眺めていると、今回のオリンピックにおける日本の健闘は素晴らしかったのではないだろうか、と思う。五輪中に日本でどのような反響が起こっていたのか不明であるし、最終的な結果について世間からどのような反応があったのかも定かではない。

日本の躍進を横目に、目に入ったのは上位二つの国である。それは米国と英国だ。米国と英国の名前を見た瞬間、両者の母国語が英語であることに気づいた。米英の覇権は、言語世界のみならずスポーツの世界にまで及んでいるのか、と少しばかり身構えざるをえない自分がいた。

先日の留学生歓迎セレモニーでの学長の挨拶からも、米英の大学が支配的なアカデミックの世界になんとか組み込み、自らの地位を確固たるものとしていく意思を感じていたのだ。アカデミックの世界では特に米英の覇権は顕著であり、そこには英語という言語の問題が密接に関係している。

とかく大学の評価に関しては、英語での研究の質や量が極めて重要な鍵を握り、英語でのプログラムの充実も重要な要素となる。そう考えると、母国語である英語を活用できる大学が圧倒的な優位性を最初から持ち、英語を第二言語とする大学は多大な苦勞を伴う。

そうした状況の中、フローニンゲン大学には尊重すべき点が幾つかある。米英の大学が上位をほとんど占めている各種の世界大学ランキングの上位100校にフローニンゲン大学は常に入っている。オランダ北部に位置するこの小さな街の大学がそうした高評価を得ている裏には、並々ならぬ大学側の努力があるのだと思う。

往々にして、こうした世界大学ランキングなるものの順位を浅はかに上げようとする場合、単純に英語での研究を推進したり、英語での教育を充実させることだけに特化してしまいがちである。私は、そうした浅薄な試みには害があると思っている。

仮にランキングを上位に上げることができたとしても、何か大切なものを失う危険性が孕んでいると思うのだ。特にそれは、自国の精神文化だろう。思うに、自国の精神文化は高度な言語に支えられることによって初めて、その深さと価値を持つと思うのだ。ある意味、学術言語というのは自国の精神文化をより涵養させる高度な言語体系だと思う。

そうした言語体系を安易に外国語である英語に置き換えようとする、自国の精神文化が根元から弱体化されてしまうのではないかと相当危惧している。この点に関して、フローニンゲン大学に見習うべき箇所は、この大学は英語での研究や教育の質と量を向上させる努力をしているだけでなく、母国語であるオランダ語での研究と教育に関しても質と量を向上させようと日々努力しているのである。

正直なところ、私はオランダ語を本格的に学ぶことをここ最近までやはり躊躇していたのだ。なぜなら、オランダ語は世界でも話者が少ないマイナー言語であり、私が所属するプログラムは全て英語で事足りるからである。しかしながら、英語で生活を乗り切ろうとするのは、母国語がオランダ語であるこの国の文化に対する単なる侮辱であると思い、さらには話者の量の問題ではなく、オランダ語が内包している質の高い豊饒な言語世界に気づかされたのである。

上述の通り、フローニンゲン大学の教授人は英語のみならず、母国語のオランダ語でも学術論文を執筆している。また歴史を遡ると、スピノザやデカルトなどもオランダ語で自身の哲学書を数多く残しているのだ。それらの事実を知った時、オランダ語は高い精神性を獲得した言語なのだとわかり、オランダ語のクラスを本格的に受講しようと思ったのだ。

ここからなぜだか、自分が母国を離れた理由の断片が浮き上がってきた。今、こうして日本語を書いている私は、決して自分の日本人性を拭い去ることはできず、自己の根元には日本語の精神文化が息づいているのである。そうしたことを考えた時、自分が守るべきものは母国の精神文化なのだと気づかされたのだ。

母国の精神文化が弱体化することは、自己を支える私の根元を腐らせることにつながると思われたのだ。何かを守るためには、それを侵食する対象を凌駕するだけの強靱さが何よりも必要である。つまり、私にとって母国の精神文化を守る何よりの実践が、日本語と英語のどちらも共により強靱なものにしていくことにある、と気づいたのだ。

これはどちらか一方であってはならない。日本語だけを鍛錬することや英語だけを鍛錬することは、あまりにも浅薄な実践だと思うのだ。しかし日本では、英語の書き言葉をネイティブを上回るレベルで涵養しようとする人は少ないだろうし、そもそも日本語を今よりも向上させようとする人も少なすぎるのではないかと危惧している。

結局、そのような事態では日本の精神文化をより育んでいくことも守ることもできないと思うのだ。フローニンゲン大学の試みを見るにつけ、私を含めた多くの日本人は、英語と日本語をさらに深めていこうとする圧倒的な努力が欠けているのだと思う。このような手ぬるい努力で自分の内面世界と自国の精神世界を深められるとは到底思えない。

オランダという国に来たのは、オランダ語という第二外国語を媒介にして英語と日本語を厳しい環境の中で鍛錬するためであったのだと思う。そして真の意味で母国の精神文化を守り、より育んでいくために、私はオランダに来たのだ。

351. 経験の内的濾過と内的分化

各種の歓迎セレモニーが終わり、落ち着きを取り戻した日常に戻っている。明後日は、心理学の修士課程に在籍する生徒だけを対象にした説明会がある。フローニンゲン大学の心理学の修士課程は10個のサブプログラムから構成されており、各プログラムの入学者数は不明であるが、ここでも多くの生徒と知り合いになることができそうである。

私のようにダイナミックシステム理論と発達心理学の双方に関心を持って入学した人もいるであろうから、彼らとお互いに学びを深めていけることを楽しみにしている。全員の前で自己紹介をする機会があれば、学習仲間を募る意図も込めて自分の関心領域を明確に伝えておこうと思う。

プログラムの本格的な始動の前に再度自分に立ち返る時間を持つことができ、現在自分の中の様々な経験が揮発されたり濾過されたりしているのを実感している。これは非常に微細な感覚なのだが、着実と自分の中でそうした作業が進行しているようなのだ。

過去すでに経験したことのあるものや、今の自分には不要であるような経験が、私の意図を超えたところで判別作業が行われ、そうした経験は揮発されていく。ここが多分に謎であり興味深い点であるが、そうした判断を行っているのは意志的な自己ではなく、何やら自己を超えた存在のようなのだ。

液体が蒸発するのと同様に、自己の外に拡散していつてしまう経験の行き先にも関心があるが、何よりも経験を揮発させる存在とその判断基準などは気になるところである。

一方、過去すでに経験したことであっても新たな意味を自分にもたらず経験や今の自分に必要な経験は、自分の中で濾過されていく。濾過された経験は、液体から不純物が除去されるのと同様に、自己の内側に純化したものとして徐々に定着していく。

これは以前取り上げた「言語による分節化(記事344)」の時にも言及したが、不純物の混じった経験と純正な経験に分別していく「内的濾過」という現象は、これも発達心理学の重要な概念である「分化(differentiation)」に該当するのではないだろうか。

言語による分節化の時に言及したのは、最も大雑把な役割において、言語は私たちと私たち以外のものを切り分ける働きを持っているということであった。実はこうした分化現象は、経験の中においても生じているように思うのだ。何を媒介にしているのかは不明だが、ある経験を現在の自己に取り込むべきなのか・そうでないのかの切り分けが私たちの内側で起こっているように思うのだ。

これは「経験の内的分化」と呼んでいいかもしれない。より厳密には、自己の内側に取り入れられた純正な経験は、そこからさらに細かく分化していき、自己の存在の至る所に浸透していく。そうした経験の内的分化が起こり、自己の内側の様々な部分に浸透していくことがなければ、それ以上の内的成熟は起こらないと考えている。

というのも、内的成熟の鍵は自分の内側で経験の統合化(integration)が起こる必要があり、統合化が起きるためには統合に必要なだけの分化された経験が必要なのである。内的濾過を経て純化された経験がどんどん分化していき、それがあるとき統合化された時に内的成熟は起こる。このようなことを考えながら、もしかしたらこうした考え方が、発達心理学者のハインツ・ワーナーが提唱した分化・統合理論の肝なのかもしれないと思った。

フローニンゲンの街について早くも一ヶ月が過ぎた。この一ヶ月を振り返ったとき、やはり今の自分は不純物を豊富に含んだ荒々しくかつ生々しい経験を十分取り入れるべき段階にあり、そうした多様な経験を濾過させることによって自分に定着させることが求められているのだと思う。

結局のところ、そうした分別作業の判断やどのような経験が自分の中で生じるのかということも私が介入できる範疇を超えているため、空気を嘔み締めるような感覚に包まれているのだが、このようなプロセスを紆余曲折を経ながら進めていくことが意識の成熟過程なのだろう。2016/9/3

352.未分化から生じる退行現象

オーストリアの生物学者ルートヴィヒ・フォン・ベルタランフィ(1901-1972)の主著“General system theory: Foundations, development, applications (1968)”を一通り読み通すのに数日要した。本書は今後も折を見つけて何度も読み返すべき書籍であると思う。

本書から考えさせられた点は無数にあるが、一つ重要なものとして、発達過程で必ず見られる「退行現象」が挙げられる。発達過程において分化が不十分であることによって、本来発達に必要な統合化が起こらず、発達課題として積み残しになったまま成長を遂げてしまうケースが多々ある。

そうしたケースが多々あるというよりもむしろ、私たちは大なり小なり、こうした積み残しを抱えたまま発達プロセスを歩んでいると言える。これは、“A guide to integral psychotherapy(本書については記事215を参照)”の著者マーク・フォーマンも指摘している点である。

分化のプロセスが不十分であり、過去の発達段階の要素が積み残しになっている場合、様々な外的刺激によってそうした積み残しが顕在化してしまうことがあるのだ。これは、未消化のものが外側に溢れ出してくるイメージである。まさにこうした現象が退行と呼べるだろう。

ジョン・エフ・ケネディ大学時代に履修していた臨床心理学の授業を思い出すと、これまでの臨床心理の現場では、退行現象を幼児期のトラウマなどに限定しがちであった。この背景には、伝統的な臨床心理学が幼少期の経験や記憶を重視するフロイトを代表とした精神分析学の影響を多分に受けているからだろう。

しかし、システム理論を活用した近年の臨床研究を見ていると、どうやら幼少期のトラウマのみを退行現象の要因とみなすことはできないようなのだ。退行現象の多くは、トラウマ的なものによって引き起こされるという限定的な説明ではなく、過去の発達過程において十分に自己に統合化されなかったものによっても引き起こされる、というより広い解釈が必要なのである。

まさにこれまでの発達過程の中で統合化されず未分化の状態に残っているものの最たる例がトラウマだと言えるだろう。しかし、トラウマというのは未分化の最たる現象であって、トラウマに分類されない未分化現象を私たちは多く抱えているのである。

ロバート・キーガンの発達理論を用いて例を考えてみると、発達段階4に重心を置いている人が発達段階3を十分に経験してこなかった場合、その人の中に発達段階3の要素が未分化のまま残っていることを意味する。そうすると、この人は発達段階3に退行してしまうリスクを多分に残していることになる。結果として、この人の現在の発達の形は歪なものとなっている可能性があるのだ。

上記のように、退行現象の根源を単純に幼少期のトラウマに限定しないことによって、これまで見過ごされていた退行現象の思わぬ引き金を発見することにつながったり、臨床実践の際に分化と統合化を進めるより包括的な支援を行うことができるのだと思う。

ベルタランフィが書き残したシステム理論と臨床心理学を関連付けた章を読むことによって、上記のようなことを思ったのである。結局のところ、退行現象というのは発達過程における未分化の要素から生じており、それを自己に再度統合化させるためには、未分化のものを適切に分化し直す必要があると考えている。

自分自身を振り返ってみると、ここ一年間において頻繁に過去の記憶が立ち現れるのはもしかすると、記憶として想起される経験が自分の発達過程の中で未分化のものとして積み残しになっており、

言語化という光を当て、言葉の分節化機能を用いて適切に分化し直すことを要求しているかのようである。

未分化のものを放置せず、言語化という実践を通して再度分化させるという工程を経て、自己の内側にそれを統合化させるというプロセスの重要性は、どうやら自分の経験に根付いた気づきのようなのだ。

353. 研究内容をまとめながら

昨日は、9/7に控えているプログラム長のルートとの面談に備え、研究内容に関するPPT資料を作成していた。研究テーマやその内容をワードやパワーポイントにまとめることを特に要求されたわけではないのだが、PPT資料を見ながら説明した方が分かりやすいだろうと思い、昨日中に説明資料を作成することにした。

こうした全体感の分かる資料を作成することは、やはり自分自身の頭の整理につながると感じさせられた。資料を作成しながら、研究で達成したい事柄と研究手法について一步深めて考える契機になり、そもそもこの研究は当該研究分野の中でどのような位置付けになっているのかを考える契機にも繋がったのだ。

この研究で用いる手法は、カート・フィッシャーのダイナミックスキル分析、ダイナミックシステムアプローチの基本的な分析手法であるロジスティック方程式、離散数理手法のセル・オートマトン、ダイナミックネットワーク分析の四つである。自分の手元にある研究データを見ながら、それら四つの研究手法をどのように適用するのかについて改めて資料を作成しながら考えていると、ダイナミックネットワーク分析の適用の仕方のみ明瞭なイメージを描けていないことが判明したのだ。

この段階でそれに気づくことができたのは幸運であり、プログラム長のルートはダイナミックネットワーク分析に精通しているため、9/7の面談で是非ともその適用方法に関して質問をしてみようと思う。

また資料を作成することによって、研究のプロセスについても再度確認することができ、自分が今の段階にいるのかも把握することができた。幸運にもすでに十分な研究データが集まっており、あと

はそれを研究手法が適用できる状態に整理することが求められる。今日はそれに取り掛かろうと思う。

今回の修士論文では、ダイナミックシステムアプローチの種々の手法を活用することに習熟し、これまで先行研究がほとんど無い成人のオンライン学習における動的学習プロセスに新しい知見を加えたい、という思いがある。同時に、この論文を単に学位取得のために執筆するのではなく、必要な修正を加えた上で査読付き論文としてどこかのジャーナルに投稿するという野心的な思いも持っている。

実際のところ、成人のオンライン学習という特定の学習形態のみならず、教育全般の研究においても、上記四つのアプローチを複合的に活用した研究は見たことがないので、真剣かつ緻密に研究を進めればどこかのジャーナルに投稿できる可能性も高まるだろう、と思っている。

さらに私が目論んでいるのは、複雑性科学と発達科学の架橋をより促進するために、メタ理論的あるいは哲学的な問題についても論文の中で言及したいと考えている。本来、ダイナミックシステム理論にまつわる哲学的諸問題に言及できるのは、この道で長らく研究を進めてきた一線級の科学者か科学哲学に精通した哲学者などだろう。

実際に、複雑性科学と発達科学の架橋に長らく従事していたポール・ヴァン・ギアートや私の論文アドバイザーであるサスキア・クネンなどが科学者の立場としてそうした哲学的諸問題を議論している。また、科学哲学などに習熟した哲学者も同様にそれらの議論を展開している。

こうした状況を見ると、科学者としての経験も浅く、体系的な哲学教育すら受けていない私がそうした哲学的諸問題に挑んでいこうとするのは時期尚早なのかもしれないが、気になる哲学的な問題がいくつか存在するため、ここは臆することなく踏み込んでいくべきだと判断した。

研究内容に関するPPT資料を作成しながら上記のようなことを考えさせられたのだ。こうしたPPT資料は、まさに知性や能力を涵養する「足場固め(scaffolding)」の役割を果たすとつくづく思った次第である。研究内容の構造が明るみになることによって、その構造の内容を埋めようとする動きや構造間の齟齬を解消しようとするような動きが自然に芽生えるのだ。こんなところにも発達支援の手法を一つ見つけることができるだろう。

354. 社会で奨励される諸々の活動とアイデンティティの喪失

一昨日、ふとした偶然によって、この五年ほど折を見て考え続けていた問題がようやく解決した。この問題は多くの人から見ると実にくだらないものと思われるだろうが、私はやたらとこの問題に時折取り憑かれていたのだ。文字で書き残すことに躊躇するほどくだらないと見なされるであろう問題であるため、その内容は脇に置き、この問題をシステム理論の観点から考えることによっていとも簡単に解決案が見つかったということだけを書き残しておく。

自分の中でシステム理論の体系が徐々に浸透してきたおかげだろうか、自分の関心テーマにシステム理論を巧く適用することが可能になり始めているようである。今朝は、複雑性科学と発達科学の架橋に関する哲学的な問題と、アイデンティティと感覚の発達に関する問題に取り掛かっていた。

前者に関しては牛歩の進みであり、何ら考えがまとまりを見せていない。一方、後者に関しては少しばかり進展があった。自我と感情の発達研究にダイナミックシステムアプローチを適用していることで有名なアラン・フォーゲルの論文“A relational perspective on the development of self and emotion”を読み、フォーゲルから色々と考えさせられる洞察を提供してもらった。

これまで私に抜け落ちていた観点は、アイデンティティの発達には常に「そこにあること」と「何かになること」の両者が相互関係を成しているということである。とかく人間の発達について考えようとすると、何かになること、つまり次の発達段階へ移行することに目が向きがちである。

しかし、アイデンティティの発達には次へ向かう力のみならず、現在の発達段階にとどまることに費やされる力も存在することを忘れてはならない、と改めて気づかされた。前者が上へ引き上げる力であれば、後者は下に引き下げる力と表現できるだろう。

アイデンティティが発達する際に、私たちはしばしば危機を経験することになるが、それは上に向かうベクトルだけの問題ではなく、上下のベクトルが生み出す均衡差がもたらす問題なのではないかと思わされたのだ。エリク・エリクソンが“Identity: Youth and crisis (1968)”で指摘しているように、私たちはキャリアの変更や結婚・出産・昇進などによる社会的な役割の変化によって、時にアイデンティティを喪失してしまうような危機を経験する。

こうしたアイデンティティの喪失という現象は、「何かになること」が強調され過ぎるあまり、「そこにあること」が忘れ去られてしまった時に誘発されやすいのではないかと思う。とかく現代社会において、転職活動、就職活動、近年において結婚活動(通称「婚活」というものまであるらしく、それらは私たちがこれまでとは違う自分になることを奨励するような活動である。

こうした活動には「そこにあること」の重要性が強調されることはない。そのため、社会で積極的に喧伝されるそれらの活動に安易に着手するとき、私たちはアイデンティティの喪失を不要に経験してしまうことにもなりかねない。何より、「そこにあること」を忘れたアイデンティティには根がなく、健全な発達を生涯にわたって遂行することはおろか、それはいずれ朽ち果ててしまう一時の花のようなものである、と思うのだ。

355. 過去・現在・未来のアイデンティティの対話

発達心理学者のアラン・フォーゲルの論文を読みながら、新たなアイデンティティは、過去もしくは現在の自分について記述することを通じて徐々に立ち現れるのではないか、ということに気づいた。アメリカから日本へ、日本からオランダへと生活環境を変えたことに伴い、見えないところで自分を上へ突き上げようとするような不思議な力を毎日感じている。

アイデンティティの発達を探究する多くの研究者が指摘しているように、自己の精神が立脚する文化の変化はアイデンティティの発達を強く加速させるのだ。また、置かれている文化を変えることによって、自己に対する新たな課題や要求が突きつけられることになる。こうした課題や要求を乗り越えて初めて、真の意味でのアイデンティティの発達がもたらされるのだと思う。

以前の記事の中で、アイデンティティの発達とは「そこにあること」と「何かになること」の均衡関係の絶妙な変化によって生じる現象であると述べた。フォーゲルの論文から考えさせられたのは、新しいアイデンティティはどうやら、「そこにあること(現在)」と「そこにあったこと(過去)」を絶えず確認することによってしか生まれられないのではないか、ということである。

今の私は耐え難い上昇力学に晒されていると感じており、日々の生活の中でやたらと「現在の自分」と「過去の自分」に関することを文章の形で書き留めようとしていると思うのだ。ここには確かに、新しいアイデンティティを構築しようとする自己の運動を見て取ることができるのだが、そこだけに目が行

くと、おそらく新たなアイデンティティは砂上の楼閣のようなものとして脆弱な形で形成されてしまうような気がしている。

それを防ぐために、私は無意識的に「そこにあること(現在)」と「そこにあったこと(過去)」を確認するような作業を毎日毎日繰り返しているように思うのだ。このことに気づいたとき、私はこうした確認作業を、現在と過去の自分にくさびを打つようなイメージとして捉えていた。

しかしながら、それは現在と過去の自分にくさびを打つというよりも、新しいアイデンティティとこれまでのアイデンティティとの対話なのではないか、と認識を改めたのだ。ここで私は、フランスの哲学者ポール・リクールが提唱した「対話的自己」という概念を思い出した。

自己は絶えず自分自身と対話を行いながら発達していくのである。その本質には過去・現在・未来のアイデンティティが対話をすることにあると思うのだ。こうした三者間の対話がなければ、新たなアイデンティティが堅牢に形成されることは起こりえないのではないかと思われる。

不思議なほど毎日現在のアイデンティティと過去のアイデンティティと対話を行っているのは、そのような理由があったのだと思う。自己が未来のアイデンティティのみと対話の機会を持つとすると、それは幻影との対話となる。自己はあくまでも、過去・現在・未来のアイデンティティの対話を促す仲介役としての役割に徹するべきだろう。

356. 闘牛心

早朝、五時過ぎに起床すると、辺りは闇であった。それは夜の闇とは性格を異にするものであり、太陽を出迎えるための小さな躍動感を含んでいる。小鳥の鳴き声が聞こえる。こんなに朝早くにもかかわらず、通勤のために自転車を漕いで駅に向かう人もいる。再び今日という新たな一日が始まるらしい。新たな一日が始まるという不可解な出来事に困惑し、今日という一日を生き切るという決意に満ちた気持ちになるのは、いつも早朝の起床した瞬間である。

これは時々起こることなのだが、今朝起床した瞬間に、自分がいる場所がわからなくなるという事態に遭遇した。正確には、自分がいる場所を誤解するというような感覚である。今朝起きた場所はフローニンゲンの今の自宅ではなく、東京の以前の自宅であるかのような錯覚があった。

この錯覚は瞬間的なものであり、部屋を見渡すと大抵はすぐに今の自宅であるという認識に至る。これは通称「寝ぼけ」と呼ばれる現象かもしれないが、それで済ますことのできない意味がそこに存在している気がするのだ。どうも、過去の記憶が現在に流れ込み、過去と現在の割れ目が埋められているような感覚がするのである。

当然ながら、過去の記憶を生み出す主体は現在の私であるから、過去の記憶はすでに現在に流れ込んでいけると言えるかもしれない。しかし、今朝感じていた感覚というのはそうではなく、過去の記憶を経験していたその時の自己と現在の自己が遭遇するような感覚なのだ。実に不可解な感覚である。

先日、哲学科に所属するキューバ人のシーサーと禅美術の話になった。どうもシーサーは、芸術にも関心があり、西洋美術のみならず東洋美術にも関心があるようなのだ。そこで十牛図の話になった。

私:「そういえば、シーサーは『十牛図』で知ってる？」

シーサー:「いや、ちょっと知らないね。どんなアートなの？」

私:「それは禅アートの一つで、簡単に言うと悟りへの道を表現したものだね。今写真を検索してみると…。ああ、あった、これだね。」

シーサー:「へえ～、面白い。こんなアートがあったのかあ。ん、英語のタイトルは“Ten Bulls”って言うみたいだね。なんで牛なの？何かの隠喩だと思うんだけど。」

私:「ああ、それはいい質問だね。確か、牛は人間の心を表していると聞いたことがあるよ。牛を人間の心として再度この絵を眺めてみると、ここで語ろうとしているストーリーがより見えてくるよね。」

シーサー:「ああ！確かに。自分の心を認識し、それを掴もうとし、うまく捉えられるようになってくる。そこから心を超越して再び元の現実世界に戻ってくるようなストーリーになってるんだ～。」

私:「うん、僕もそう解釈してるよ。」

シーサーとのやりとりの最中、十牛図の牛の写真を見ていると、自分の心の性質について思いを巡らさずにはいられなかった。写真の中には、牛を手なずけている姿が見られるが、果たして私は自分の心を手なずけることなどできているのだろうか？という疑問がわき上がったのである。

人間の心というのは温和な側面もあれば、闘牛のような側面もある。このところ、自分の心が闘牛に化け、何かに向かって猛烈に突進しようとしているのによく感じる。こうした闘牛のような心の側面は、間違いなく自分の力強さを生み出す根源のようなものであり、非常に大切なものだと思っている。この闘牛と自己をともに超越していくまでの道のりはとても長く、当面はこの闘牛を乗り越えることが優先課題と思う。

気がつくと、早朝の闇が消え去り、広大な水色の空に朝焼けが塗られていた。今日という一日が確かに始まるのだと感じる。

357. 天気雨からの教示:「等結果性」と「初期状態依存性」

天気雨というのは本当に美しいものだとつくづく思う。先ほど、突然天気雨が降り出した時、私は思わず仕事の手を止めた。すぐに窓の方に駆け寄り、天気雨が降り止むまでその一部始終をただ眺めていた。

数分後、雨が降り止み、道路の地面には雨が降ったという形跡だけが残っている。その形跡だけを見た人は、仮にそれが天気雨によってもたらされたものであると気づいたとしても、その天気雨がもたらした味については知る由も無いだろう。その道路に残された雨の形跡は、鬱蒼とした霧囲気の中で降り注いだ雨によってもたらされたのではなく、心のしこりを解きほぐすかのような恍惚とした霧囲気の中で降り注いだ天気雨がもたらしたものなのだ。

このことは私たちにある重要なことを教えてくれる。ダイナミックシステム理論における「等結果性 (equifinality)」という重要な概念について聞いたことはあるだろうか？この概念を一言で述べると、動的なシステムにおいて、最終的なシステムの状態が同じであったとしても、そこには全く異なる初期の状態があったかもしれず、また最終的な状態に至るまでの道筋は実に多様な場合がある、ということを示すものだ——「等結果性」というのは元々、一般システム理論を提唱したルートヴィヒ・フォン・ベルタランフィが最初に提出した概念である。

これは、最終的に同じ結果に至ったとしても、その出発点やプロセスが異なる場合がある、という当たり前のことを示しているに過ぎないと思われるかもしれない。確かにそれはごくありふれた表現なのであるが、動的なシステムの特性を考えると、これは驚くべきことなのである。

動的システムというのは、構成要素が絶えず相互に影響を与えながら複雑な挙動を示すシステムである。人間の脳や心、天気や金融市場などはまさに動的なシステムであり、初期値が異なっても、そしてどんなに複雑な発達プロセスを辿ったとしても、最終的には全く同じ状態に行き着くことがある、というのは驚くべきことではないだろうか。

ここで注意が必要なのは、一つの動的なシステムにはその挙動を決定づける固有の法則が存在しており、初期値を変えるとシステムの挙動に多大な影響を及ぼし、当然ながら最終的なシステムの状態が変わる。ダイナミックシステム理論において、この特性は「初期状態依存性 (initial condition dependence)」と呼ばれる。

一見すると、動的なシステムの特徴である等結果性と初期状態依存性というのは相矛盾するように思える。私自身、ダイナミックシステム理論を学び始めた頃は、これらの特徴は互いに矛盾しているのではないかと思っていた。しかし、それらの概念は共存在が可能なのだ。

簡単に述べると、初期状態依存性は全ての動的なシステムに常に当てはまる特徴であるが、等結果性というのは常に当てはまるものではない。つまり、等結果性というのは、動的なシステムにおいて、最終的なシステムの状態が同一であっても、そこには全く異なる初期の状態や最終的な状態に至るまでの多様な道筋が存在する場合がある、という可能性を示すものなのだ。

要するに、この天気雨が教えてくれたことは、システム的最终的な結果のみを見るのではなく、そのプロセスを見ることの大切さである。天気というのはまさに動的なシステムであり、そこに等結果性が生じているとすれば、仮に最終的な状態は同じでも、最終的な状態に至るプロセスの中での挙動は多様だ、ということである。仮に等結果性が存在していない場合にせよ、天気がそもそも動的なシステムであるがゆえに初期状態依存性を持ち、その挙動は常に複雑かつ多様なのである。

これはまさに発達のプロセスを把握し、プロセスに介入していくことの重要性を暗に示しているのではないだろうか。確かに、初期値を特定し、システムの法則性を掴んでダイナミックシステムアプローチを用いれば、システムの最終的な状態を事前に把握することが可能である。

だが、個人の発達支援も組織の発達支援もまさにプロセスに介入することによって、新たな法則性をそのシステムに構築していくことが可能になるのだ。つまり、システムの構成要素間の関係性に働きかけ、システム全体の挙動を決定づける法則性を書き換えていくことが可能なのだ。

このように、動的なシステムが持つプロセスと構成要素の関係性へ介入していくことが発達支援の肝だろう。このようなことを先ほどの天気雨が私に教えてくれたのだ。同じ雨の痕跡だとしても、一方に虹の姿を見ることができないだろうか。

358. フローニンゲン大学のキャンパスを歩きながら

今日は午後から、心理学の修士課程に所属する学生向けのガイダンスに参加してきた。通学路の途中に“Noorderplantsoen”という市民にとって憩いの公園があり、この公園内を歩きながら大学キャンパスに向かうことができるのは実に幸福感を覚える。この季節はまだ緑豊かであり、公園内の植物や噴水などを堪能しながらゆっくりと歩くことができる。

習慣にしているランニングでもこの公園を走るのだが、これからしばらくの間、大学に通うときにもこの公園にはお世話になる。フローニンゲンで生活を始めて間も無いこの時期に見える公園の景色と、フローニンゲンを去る時期に見える景色はだいぶ違うのかもしれない、ということを今から考えてしまう自分がいる。

そのようなことを考えながら、自宅から15分ほど歩くと、ガイダンスが行われるキャンパスに到着した。面白いことに、フローニンゲン大学のキャンパスはフローニンゲンの街のいろんな箇所に点在しているのだ。もちろん、各学科はメインとなるキャンパスを持っているのだが、時に街の中心部にある大学のメインの建物(Academy Building)の中で授業が行われたり、時に街の中心部を離れた各学科のメインのキャンパスの中で授業が行われたりする。

今日は、心理学科・社会学科・教育学科という社会科学系の三つの学科が集まるメインのキャンパスに足を運び、そこでガイダンスを受けてきた。ガイダンスが行われる教室に到着すると、まだ教室は開いていなかった。教室の外で待っていると、肩越しに声をかけられた。

アジア系の女性:「こんにちは。ここは心理学科のガイダンスが行われる教室ですか？」

私:「ええ、そうですよ。」

アジア系の女性:「よかったです。ちょっと迷ってしまって(笑)。初めまして、タタと言います。」

私:「洋平と言います。実は僕も迷ってました(笑)。タタさんはどちらから来られたのですか？」

タタ:「インドネシアからです。あなたは？」

私:「おお、インドネシアからですか〜。僕は日本から来ました。心理学科のどのプログラムに所属しているんですか？」

タタ:「『タレントディベロップメントと創造性発達』プログラムです。」

私:「あっ、同じプログラムですね！」

タタ:「それは嬉しいです！今年開設されたばかりのプログラムなので、私たちは第一号ですね〜。」

私:「そうですね〜。同じプログラムに在籍しているのでこれからも宜しくお願いします。」

ここで偶然にも私は、同じプログラムに所属するタタというインドネシア人と知り合うことができたのだった。奨学金授与のセレモニーで知り合ったタイ人のアイと同様に、タタもとても親しみやすい雰囲気を出していた。同じアジア人であるということや同じプログラムに所属しているということも彼女に親近感を覚えた理由なのかもしれない。いずれにせよ、始めて同じプログラムに所属している人と知り合いになることができたので、この偶然には感謝している。

ガイダンスが始まると、修士課程のコーディネーターを務めるアリから全員に対して、「どこの国から来たのか？」という質問があった。教室の最前列に陣取っていた私から順次、各々の出身国を紹介していった。予想していた通りであるが、留学生の多くはEU圏から来ている。覚えている範囲で言うと、イギリス、スコットランド、ドイツ、スウェーデン、ギリシャなど、ほとんどがEU圏からの留学生である。

非EU圏から来た留学生を分類すると、やはり中国や韓国を中心としたアジア系が多い。タタのようにインドネシアから来た人や、私のように日本から来た人は少数派である。参加者全員からの出身国の紹介があったところで、修士課程の内容に関するガイダンスが始まった。

ガイダンスが思った以上に速やかに終了したので、その足で今学期に履修するコースのクラスが行われる教室を下見に行ってきた。心理学科が所属するキャンパスを散策していると、いくつかお洒落な建物があることに気づいた。モダンな美術館のような建物や何やら古風な家のような建物まである。これはなぜだかよくわからないのだが、それらの建物は何の違和感もなく私の感覚に入り込んでいくのだ。つまり、それらの建物に対して嫌悪感を抱くことや侮蔑感を抱くことなく、逆に親近感を持って接することができる自分がいるのである。

もしかしたらそうした感覚を引き起こしているのは、このキャンパスを取り囲む景観とこれらの建物が見事な調和をなしており、それらの建物を建設した人の意図が私の思想とどこかでつながっているからかもしれない、と思わされた。

フローニンゲン大学は数多くのキャンパスと施設があり、おそらく卒業までに全く足を踏み入れない場所もあると思う。ひょっとすると、心理学科が所属するキャンパスの中でさえ、訪れることのない場所もあるだろう。これから少しずつ折を見て、キャンパス内の散策を進めていきたい。2016/9/5

359. オランダ語クラスの開始

今日からいよいよ週二回のオランダ語のクラスが始まった。実は、最も初級のクラスはその他の曜日や時間帯もあり、履修登録をする際に早朝九時から始まるこの時間帯のクラスが一番人気がないようだった。私としては、夕方の時間帯や夜の時間帯を避けたかったため、この時間帯にクラスが提供されていることをとても有り難く思っていた。

この時期のフローニンゲンの朝はすでに寒くなってきており、長袖やジャケットを羽織っている人も
いるくらいである。本日のクラスに参加することを心待ちにしていた私は学習熱で満たされており、
そのような気温の中を半袖で闊歩していた。

自宅から15分ほど歩き、語学センターに到着した。教室に入るとすでに10名ぐらいの履修者がいる
ことに気づき、先生であるリセットが笑顔を浮かべながらオランダ語で私に挨拶をしてくれた。合計
で15名ぐらいの履修者だろうか、大きすぎず小さすぎずの程よい規模でこのクラスが開始されること
になった。

このクラスは最も初級レベルであるが、クラス開始からリセットがオランダ語で色々と喋りだし、私を
含めた履修者一同は戸惑いと好奇心を含んだ笑顔になった。後々気づいたのだが、リセットはそ
れほど英語に堪能ではないようなのだ。もちろん、発音などは綺麗に聞こえるのだが、英語の語彙
がそれほど豊富ではないということを自らも指摘していた。

そうしたこともあり、このクラスは本当にオランダ語漬けに近い状態にさせられる。まさにこうした状況
に置かれることによって、ある特定の言語が磨かれていくのだと思う。オランダ語に占有された言語
空間に縛られる快感とでも言ったらいいのだろうか、リセットがオランダ語で作り出した教室空間に
浸っている私は、新しい言語を本格的に学ぼうと志した時に湧き上がるあの高揚感と気概に満ちて
いたのだ。

当然ながら他の学習と同様に、言語にも発達段階があり、これからどのような発達プロセスを自分が
辿っていくのか実に楽しみである。特に、オランダ語の習得度合いに応じて、自分の英語や日本語
がどのように変化するのかを観察し、三つの言語の相互関係が私の認知や感情にどのような働き
かけをしていくのかも逃さず観察していきたいと思う。

クラス開始前に、私の隣に座っていたイタリア人と雑談をしていた。彼はミランから来た産業組織心
理学の修士課程に在籍するファブリツィオと言う。

ファブリツィオ:「どうオランダ語？」

私:「いや〜、日本人にはなかなか難しいね。」

ファブリツィオ:「そうか〜。実はイタリア人である僕にとっても難しいんだよ。」

私:「そうなの？ヨーロッパ言語を扱う人にとっては非ヨーロッパ言語を扱う人よりもオランダ語は楽かと思ひ込んでたんだけど。」

ファブリツィオ:「いやいや、そうでもないね。ドイツ語はオランダ語と近いからドイツ人は比較的楽だと思うけど、イタリア語はどちらかというときスペイン語寄りなんだ。だから、僕にとってもオランダ語は難しいよ。」

確かに、ドイツ語はオランダ語に近いということを知っていた。というのも、語学センターがドイツ語話者のためにオランダ語の特別クラスを設けている、ということを見つけたからである。しかし、イタリア語がどちらかというときスペイン語に近いというのは知らず、どちらの言語にも深く触れたことがないので、両者が似ているという感覚もピンと来ていないが、それは面白いことを聞いたと思った。

実際にクラスが開始されると、まずは自己紹介をオランダ語で言うことから始まった。名前の言い方、出身地の言い方、住所の言い方などから始まった。15人の出身国は多様であり、日本、中国、インドネシア、アイルランド、ドイツ、スウェーデン、ロシア、ギリシャ、イタリア、ルーマニア、ポルトガルなどの国々であった。

これらの国々の全ての言語を習得したら、自分の認識世界はどのような変貌を遂げるのだろうか？それらの言語は世界をどのように把握しているのだろうか？という点が気になり始めた。上記で列挙した国には人生を通じて一度も足を踏み入れない場所もあるだろうし、それらの言語を全て習得することも極めて難しいだろう。そのため、自分の内側と外側に触れられない世界が今後一生付きまとうことに対して、恐怖というよりも畏怖の気持ちを持ったのだ。

一通り挨拶が言えるようになると、次にテキストにある会話事例を音読することに多くの時間が当てられた。このクラスでは、文章を書いたり読んだりすることよりも、とにかく話すことに比重が置かれている。オランダ語独特の「g」の音の出し方やアルファベットの見た目からは想像も付かないような音の単語もあり、文字認識を活性化させるよりも、聴覚認識を活性化させながらとにかく音を出していく訓練が必要だと思った。

英語において「v」と「b」、「r」と「l」の発音が適切にできるようになるには訓練しかなかったため、オランダ語においてもそれは同様だと思う。どのくらいの練習量で、どのようなタイミングで、今は非常に難解なオランダ語の発音が身につくのか楽しみである。

このクラスと来学期に履修予定のもう一段レベルの高いコースで使う“Nederlands in gang: Methode NT2 voor hoogopgeleide anderstaligen”というテキストは非常に中身が充実していると思う。掲載されている会話事例は、日常生活で頻出する文脈に基づいた対話であり、文法についても網羅的に押さえられていると思う。

また、このテキストは独自のウェブサイトとも連携しており、テキストそれぞれに固有の認証コードがあり、そのウェブサイトにログインすると、会話事例のオーディオを聴くことができたり、語彙を増やすためのエクササイズなどを活用することができる。リセットが持っているテキストを見ると、とても使い込まれており、過去何年にもわたってこのクラスを教えてきたことを静かに物語っている。その声を聞きながら、私もこのテキスト一冊に絞り、掲載されている単語や文法を一つも漏らすことなく習得できるように、このテキストを使い込んでいこうと思う。

このテキストと二人三脚となり、新しい言語世界を開拓していこうという強い気持ちを持ちながら、今日の学習項目を繰り返し復習しよう。次回のクラスは金曜日の早朝だ。2016/9/6

360. オートポイエーシスとアロポイエーシス

ルートヴィヒ・フォン・ベルタランフィの主著“General system theory (1968)”を読み終え、次にジョン・ミンガーの“Systems thinking, critical realism and philosophy (2014)”という書籍に取り掛かっている。無駄に書籍を増やさないように慎重に吟味をして、自分が必要とする書籍だけを購入するようにしているため、当たり前ではあるがこの書籍も内容が実に充実していると思った。

フローニンゲン大学ではダイナミックシステムアプローチに関する技術的(数学的)な訓練を積むことになるため、それと並行して、ダイナミックシステム理論に関する哲学的な理解を自分で深めていこうと考えている。そうした一貫として、ミンガーのこの書籍はシステム理論に関する哲学的な話題について多くのことを教えてくれ、それがきっかけとなり様々なことを考えさせてくれる。

ダイナミックシステム理論の母体となるシステム理論の中で用いられる様々な概念を哲学的に捉え直すことによって、数学的なアプローチだけを採用しては見えない境地が開けてくる。何より、数式を駆使した技術的な側面ばかりに関心を持って研究を進めることは、どこかその研究を浅薄なものにしてしまう危険性があると思っている。そうしたことを考えると、本書が扱う各々のトピックは見事に自分の関心と合致していると言える。

システム理論を学ぶ上で、頻出かつ非常に重要な概念は「自己組織化」だろう。同時に、チリの生物学者ウンベルト・マトゥラーナとフランシスコ・ヴァレラによって提唱された「オートポイエーシス(自己産出)」という概念も非常に重要になる。ミンガーの書籍の中で「オートポイエーシス」を扱う章を読んでいた時に、ある記憶が蘇ってきた。

それは数ヶ月前に日本で生活をしている時に、ジャガイモの皮をむいている最中、皮むき器で左手の親指の指紋と肉をえぐってしまった、という記憶である。応急処置として、えぐれた皮と肉を引き剥がすのではなく、それらごと右手で押さえながらすぐに止血をした。この処置が適切だったのか、比較的速やかに回復したことを思い出したのだ。

回復過程で不思議に思ったのは、一週間後には以前と同様の指紋と肉がそこにあるということであった。もちろん、今回は皮と肉を引き剥がさず再利用したこともあるが、仮に皮と肉を引き剥がしたとしても、そこで再生されるものは同じく私の皮と肉であるということが不思議だったのだ。つまり、なぜ傷口からジャガイモではなく、以前と同じような姿をした自分の皮と肉がそこに生まれてきたのか？ということに関心を持ったのである。

それは私たちの身体がオートポイエーシスを伴うシステムに他ならないからである。オートポイエーシスとは簡単に述べると、あるシステムがそれ自体を創出していくことを意味する。まさに、この例で言えば、損傷した皮と肉を埋める形で新たな皮と肉が創出されたことは、オートポイエーシスの働きのおかげだろう。

仮に、傷口から以前と同じような姿を持つ皮や肉ではなく、ジャガイモが創出されれば、それは私の身体がオートポイエーシスという機能を伴っていないことになってしまう。仮に、傷口から私の皮や肉以外のものが出てくるとき、それを「アロポイエーシス」と言う。

アロポイエーシスとは要するに、システムがシステムそれ自体を生み出すのではなく、種類の違うものを生み出すことを指す。例えば、車の工場がわかりやすい例だろう。工場は一つのシステムとして機能しているが、原材料がこの工場というシステムのインプットとして注入されたとき、アウトプットは何だろうか？

仮に車の工場がオートポイエーシスの働きをしていれば、工場そのものがアウトプットとして生まれてくるはずである。しかし、「工場が車の製造に必要な原材料を使って工場を作る」というのはおかしい話である。実際にもそのようなことは起こらず、原材料から車というアウトプットが生まれてくるはずである。これはまさに、車の工場がアロポイエーシスとして機能しているからなのだ。

人間の知性や能力は、オートポイエーシスの働きによって発達していくと言われているが、そこにアロポイエーシスの特性も見ることはいかなるだろうか？ 自己を絶えず産出していく過程で質的に異なるものが産出されること、これがまさに構造的発達であり、システム理論では「創発」や「位相変異」と呼ばれたりするが、こうした現象をオートポイエーシスの中の一つの特異な現象とみなすのか、アロポイエーシス的な現象とみなすのかはもう少し考えてみなければいけない。

質的に異なるものを絶えず産出し続けることをオートポイエーシスの本質とみなし、種類の異なるものを絶えず産出し続けることをアロポイエーシスの本質だとみなせば、知性や能力の発達現象はやはり多くの研究者が指摘するようにオートポイエーシスの産物なのだろう。なぜなら、知性や能力の発達現象は種類の変化ではなく、質的な変化を本質とするからである。このテーマについては今後も引き続き考えていきたい。